

二〇一九年四月下旬、古都・鎌倉の鶴岡八幡宮境内に建つ鎌倉文華館を訪ねる機会があった。良く知られているように、この建物は、元々は、一九五〇年の指名コンペで一等に選ばれた坂倉準三の設計案により、敗戦直後の一九五一年に竣工した神奈川県立近代美術館である。同館は、平家池に面する借用地に建てられた経緯もあり、賃貸借契約の満了する二〇一六年一月三十一日をもって、六五年に及ぶ我が国最初の公立の近代美術館としての活動を終え、三月三十一日に閉館した。そのため、存続が危ぶまれたが、地道な保存運動も幸いしたのだから。神奈川県は、その土壇場になって最初に建設された本館を県指定文化財に指定する。

こうして、坂倉存命中の一九六六年に増築されたガラス張りの新館と附属屋は解体撤去されたが、本館は、八幡宮に無償で譲渡され、丹青研究所の設計により、耐震を含む改修工事が施され、二〇一九年三月、鎌倉文華館に生まれ変わった。恐るおそる現地を訪れて、竣工時の清新な姿に戻った建物を前に、正直、美術館としての歴史の終焉を直視するつらさを感じてしまった。

さて、ここで考えてみたいのは、この美術館に代表されるモダニズム建築は何を求めたのかという点だ。昭和が平成に代わる一九八九年、朝日新聞記者の松葉一清は、著書『幻影の日本―昭和建築の軌跡』（朝日新聞社）の中で、「貧困の美学」と題して、この美術館を次のように論じていた。

「神奈川県立近代美術館」の名は、戦後建築、ひいては昭和の建築、いや日本の近代建築のうえで、『不滅の金字塔』として響きわたっている。（中略）しかし、このアスベスト・ボード張りの美術館は、本当

に昭和の建築、いや日本の建築を代表するるのであろうか。（中略）これは、やはり博覧会の仮設建築なのだ。恒久に存在して、時間の経過とともに重みを増していく、練成した空間ではない。これを『金字塔』とせざるを得ない昭和の建築とは、いかなるものだったのか。」

こう問いかけた上で、松葉は、竣工時に「日本近代建築のマイルストーン」と評価された前川國男の日本相互銀行本店（一九

記憶の建築 松隈 洋

神奈川県立近代美術館（現・鎌倉文華館）1951年
戦後モダニズムの試金石



平家池越しに見る建物全景



中庭から見た1階テラス

松葉は、モダニズム建築には、「根本的な意味での豊かさが欠けている」と指摘したのである。ここで、唐突ながら、松葉が用いた「貧困の美学」という言葉に別の視点を与えてくれる文章を紹介したい。それは、ドイツの思想家ヴァルター・ベンヤミンが、ナチスが独裁体制を掌握した一九三三年に亡命先で執筆した「経験と貧困」と題するエッセイだ。驚かされるのは、文中に、アドルフ・ロースやル・コルビュジエ、バウハウスの動きが取り上げられ、「貧困」

ている。（中略）だが、多数の者たちはいま新たに、手にしているごくわずかのもの遣り繰りしなければならぬ。根本的に新しいものを自身の課題として、それを洞察と断念のうえに基礎づけた人びとと、彼らは気脈を通じている。これらの人びとの建築、絵画、物語のなかで、人類は、どうしてもそうしなければならぬのなら、文化を超えて生き存えてゆく用意をしているのだ。そして、最も重要なのは、人類はそれを笑いながらしている、ということである。（『ベンヤミン・コレクション2』ちくま学芸文庫）

五二年）も取り上げ、この二つの建築には、「工業製品を用いさえすれば、それで新時代を表現しようと確信した建築家と批評家の過る建築観、時代観が、そこに投影されている」として、次のように断じたのだ。

「貧困の美学―もし神奈川県立近代美術館や日本相互銀行本店のような建築を、戦後建築の歩みのなかで、『不滅の金字塔』として認知するならば、そこに支配的な表現は、そう呼ぶしかない。」

という言葉に、むしろある希望を託して、次のように書き留めていることである。

「私たちは貧困になってしまった。人類の遺産をひとつまたひとつ、次々に犠牲にして手放し、真価の百分の一の値で質に入れ、その代償として差し出された（アクチュアルなもの）という小銭を、やっとの思いで手にしなければならなかった。戸口には経済危機が顔を覗かせており、その背後にはひとつの影が、次の戦争が、忍び寄ってきて

ベンヤミンがここで提示した「（アクチュアルなもの）という小銭」こそ、バウハウスやル・コルビュジエらが求めたモダニズム建築に込められていたものだったのではないか。すなわち、権威や見せかけで厚塗りされて形骸化し、人びとの暮らしに役に立たなくなった様式建築を否定し、むしろそれ以前の無名の建築が持っていたような、簡素でありながらも人びとの切実な日常の希望に応え得る現実的（アクチュアル）な建築であることを目指していたのだと思う。むしろ、問われているのは、敗戦後の極めて貧しい時代に産声を上げたこの美術館のような建築を、その後の私たちは確かな存在へと守り育ててきたのかということではなかろうか。確かに原形は残されたが、それを支える思想は果たして共有されたのか。この美術館は、これからも繰返しそう問いつける試金石であり続けるに違いない。

松隈 洋

京都工芸繊維大学教授、博士（工学）。一九五七年兵庫県生まれ。一九八〇年京都大学卒業後、前川國男建築設計事務所に入所。二〇〇八年十月より現職。